FUJIFILM SQUARE

フジフイルム スクエア 写真歴史博物館 企画写真展

人間写真機・須田一政

作品展「日本の風景・余白の街で」

2022年9月29日(木)–12月28日(水)

時として、風景としての機能が固定化してしまった東京を離れ、気ままに旅をする。見知らぬ土地、美しい景観、荘厳な歴史建築。しかし、その足をつかむのは絶えず私と向いあっているありふれた光景である。自らの周辺におこり得る刹那的な特殊空間が、突然うかび上ってくる。旅上、一種の迫力をもって歪曲し現出する日常は、生々しい鋭さで私の目前をかすり、既存風景への視線をさえぎろうとする。
名所、観光地と呼ばれる佳景を「ひかり」とするならば、その平面上に在る日常という「かげ」の存在の状態が私の原風景なのかもしれない。[1]

須田一政

1. 須田一政「日本の風景・余白の街で」ステートメント(プレスリリース、富士フォトサロン、1986年)

「日本の風景・余白の街で」は1986年、フジフイルム スクエアの前身にあたる富士フォトサロン(東京・銀座)のプロフェッショナル・スペースで開催された個展において、発表されたカラー写真群です。本シリーズは当時、6×6cm判のカメラで撮影されたモノクロ作品で高い評価を受けていた須田が、カラー作品によって自らの新境地を開く新作の一つとして注目を集めました。本展では、1986年に展示された43点の中から32点を厳選し、当時の作品の階調、色調を忠実に再現した新たなプリントで展示しています。

これらの作品が撮影されたのは1982年から1986年のことです。1970年代前半に高度経済成長の終幕を迎えた日本は、1980年代後半から始まるバブル景気との狭間で、低迷の時代にありました。70年代は、東京の都市化が急速に進んだ一方で、地方の伝統的な風景が失われた時代でした。そして、国の急激な変化は80年代に入り、日本人のアイデンティティの揺らぎへとつながっていきます。人々の不安げな表情、路上に傾く暗い影、複雑に折り重なる交通標識など、日常の光景に不意にあらわれる時世の表情を須田は意味深にとらえ、どこか不穏な時代の空気を鋭く察知し、表現しています。

タイトルの「余白の街で」の「余白」という言葉には、「名所、観光地と呼ばれる佳景」の周縁にある余白、いわばメインの外側にあるものといった意味合いがあると解釈できますが、それだけでなく、「余白」を「空白」と読みかえれば、空虚さや、満たされない心の空洞のような、心理的な意味合いも重ねられているように思えます。人々や社会全体の漠然とした不安、それが投影される光景に反応する写真家自身にもそのような心情があったかどうか定かではありませんが、現実を冷静に観察しながら、言葉で表現しがたい感情を非言語表現である写真によって具現化する、写真家特有の思考や行為がここにあるといえるでしょう。

「物ってちょっと角度が違うとこんなに面白く見えるのかとか、こんなにぎょっとするような表面に写ってしまうのかといったことに、いつも驚きながら写真を撮ってきましたし、その結果として自分の作品が出来上がってきた」[2] と須田は語っています。見慣れた風景や何気ない事物であっても、須田の眼が選んだ角度、選んだ瞬間を通した途端に浮かび上がってくる斬新な光景があります。須田はまるで実験をするように、カメラによって、写真によって、日常に潜む異世界を発見すること、そしてそれを探求することに生涯、興味を抱き続け、楽しんでいました。モノクロ作品の制作で磨かれた、須田独特の観察眼はカラー作品でも同様に生かされていますが、それに加え、撮影時の時間帯や天候、光源によって変わる色調を敏感にとらえ、風景の中に散らばる雑多な色彩を、作品の強烈なインパクトへと見事に変換させていることがわかります。

2.「平成25年度収蔵展（新規重点収集作家個展）須田一政」（『東京都写真美術館ニュースeyes』78号、東京都写真美術館、2013年、p.2）

須田の使用していた6×6cm判カメラは、デジタルカメラやスマートフォンのカメラ機能とは違い、ピントを合わせるのも、露出を合わせるのも、もちろん手動で操作しなければなりませんでした。基本的なことですが、街中でのスナップ写真は、どの瞬間をとらえるかということが決定的な要素であり、いわば被写体にピントを合わせることこそが最重要のポイントとなります。しかし、カラーリバーサルフィルム（カラーポジフィルム）の場合はさらに、モノクロフィルムやカラーネガフィルムと比べても適正露出の範囲が極端に狭く、撮影時の光の状態の見極めと、シャッタースピード、絞りの調節が写真の出来を大きく左右します。そのため、ピントを合わせることだけでなく、露出の合わせ方にもその人の技量が大きく関わります。シャッターを切る前に、瞬時にピントと露出を合わせる。一昔前の写真家にとっては当たり前のことでしたが、そのテクニックは、豊富な経験とその蓄積を要する難度の高い技術でした。「人間写真機」とは、写真のことしか頭になく、あらゆる状況において無遠慮に反射的にシャッターを切ってしまう須田の、写真家としての、そして写真家以上のいわば「習性」を表した造語ですが、ピントや露出を瞬時に合わせる高度な撮影技術も「人間写真機」の並外れた高機能の一つでした。

須田は1970年代後半から、カラー作品の制作に取り組み始めていますが、本作では、カラーリバーサルフィルム「フジクローム」（富士フイルム製）が主に使用されており、1986年発表当時のプリントは、ネガ起こしせず、リバーサルフィルムから直接露光し現像する、いわゆる「ポジ・ポジ方式」のダイレクトプリント（商品名「フジクロームRPプリント」）によって制作されていました。[3] ダイレクトプリントは豊かな階調表現や赤色の発色が特徴的でもあり、艶のある濃厚な赤色は、須田のこだわりでもありました。

3. 本展展示のプリントはラムダ方式による発色現像方式印画

解説：大澤友貴（フォトクラシック）